

西洋人の和服への誤謬 ごびゅう

図書館長・教授(西洋服装史担当)石山 彰

館の資料と文献収集のため、許可を得てパリ、ロンドン、ニューヨークへと出掛けた。昨秋のことである。あわただしいツアーは数回あったものの、今度のように時間をかけて欧米の本屋巡りができたのはもう20年ぶりのことである。だから、その後はどう変っているだろうか、という想像と期待も大きかった。廻った古書店は合計30店近くにのぼるだろうか。ほかに、美術館や博物館も6・7館のぞいて廻った。文献・資料収集に際して、そこのブック・ショップは大きな意味をもつからである。

なんとといっても、最大の収穫はPietro Bertelliの *Diversarū Nationum Habitus*, Patavii, 1592, つまりピエトロ・ベルテツリの『諸国民の服装』、および *Le Bon Genre*, Paris 1801~1820, つまり『よき趣味』のオリジナル版画の初版104枚を購入できたことであり、大沼理事長のご理解に謝意を申し上げねばならない。これらについては追って詳しい解題を予定しているのので、今回はこれらに次ぐ資料の一部について紹介したいと思う。それは〔383.1-A〕Pieter van der Aa, *Habillemens de plusieurs Nations, Representz au natural en cent trente-sept belles figures*, Leyde, Van der Aa, ca 1710. つまりピエテル・ファン・テル・アア『数カ国民の服装, 137の見事な画像によるありのままの描写』であり、1710年頃オランダのライデンで出版されている。1710年といえば日本は元禄に次ぐ宝永年間、五代将軍綱吉から家宣に移っており、その前年には新井白石が『西洋紀聞』を著わしている。そして、ファン・テル・アアの本は、日本人の服装を紹介したものとしては、ヨーロッパの刊本のうちでも最も古い部類に属している。もっとも、著名なヴェチエツリオの『世界各地の古代および現代の服装』〔383.1-V〕Cesare Vecellio, *De gli Ha-*

biti antichi et moderni di Diverse Parti del Mondo, Venetia, 1590. の中には天正少年使節の一人の姿が日本人として描かれており、これがヨーロッパで紹介された最初の日本人ということになるが、残念ながら、彼は和服を着た姿としてでなく、ローマ法王から賜わった洋服を着た日本人として描かれている(1図)。

ところで、私たちは西洋人の描く和服姿には誤謬を見出す場合が多く、正確な描写を発見できることはまれなのに気付く。それは何も^{そびゅう}溯及時代に限ったことではなく、今でもそうなのである。ヨーロッパの人々にとって、和服は世界で最も難解な衣服の一つなのである。たとえば〔383.1-H〕Robert Harrold, *Folk Costume of the World*, Dorset, 1978. のpl. 63をみていただきたい。同



1図 ローマ法王から賜わった洋服(法衣)を着た天正少年使節

様に〔381-B〕Angela Bradshaw, *World Costumes*, London, 1952. のpp. 104~108をみていただきたい。ハロルドでは振り袖姿の女性の袴も帯も構造的な理解が全くできていないし、振り袖の袖は巨大なカフスとして描かれている。また男性の紋付の紋はブローチとして描かれているし、羽織のひもも袴の腰もおかしい。何よりも白足袋はブーツ状に描かれている。ブラッドショーにも類似した多くの誤謬がみられる。袴合せはほとんど無視され、きものはワンピースかまたはブラウスとスカート感覚で描かれている。“ゲタ”と“ソウリ”に至っては全くサンダルになっている。和服と身体との形状乖離カイレイがあまりにも甚だしいために、両者がどのように交渉するのか見当がつかないのである。

現代にしてそうなのだから、19世紀初期ともなると和服姿の日本人など想像の範疇を出なかつたのであろう。〔382.08-F2〕Dottor Ginlis Ferrario, *Il costume antics et Moderns, Asie vol. 2*, Firenze, 1823. および〔382.08-W-23〕Ed.



2図 ファン・テル・アアの『数か国民の服装』に描かれた「日本の貴婦人」

by Frederic Shoberl, *The World in Miniature, vol. 23 Japan*, London, 1823. これら2著は、この期を代表するものといえる。すなわち、ジュリオ・フェラリオ博士編『古今の服装』全30巻の中、アジア篇の第2巻であり、もう一つはフレデリック・ショバル編



3図 2図によって描かれたショバルの「儀礼服の婦人」

『小型本でみる世界』第23巻、日本、である。いずれも1823年刊である。日本の文政6年に当り、この年ドイツ人のオランダ商館医師シーボルトが長崎の出島に着任している。

さて、冒頭のファン・テル・アアの『数か国民の服装』は、これらに先立つこと110余年であり、しかも図版137枚中36枚を中国人の服装に、そして25枚を日本人の服装に当てているから驚く。こうしてファン・テル・アアの刊本は、その後のヨーロッパの刊本にみる日本人の服装の典拠となったのである。その何よりの証拠は、前記1823年の二人の刊本、つまりフェラリオ編『古今の服装』アジア篇第2巻の図版87「日本人の衣服」（P. 260の対面）、およびショバル編『小型本でみる世界』第23巻の口絵、P. 59対面の図版「武士」、P. 138の対面の図版「儀礼服の婦人」（3図）、P. 212の対面の図版「外出する婦人」、P. 234の対面の図版「レスラー」およびP. 250の対面の図版「漁師」、P. 255の対面の図版「漁師の妻」などに、それがはっきりとあらわれている。彼らはまさしくファン・テル・アア(2図)によってそれらを描いたことが明らかとなったわけである。